補訂 新體國語教本

藤岡 藤井

375.9
Fu10
資料室

42071
教科書文庫
4
810
41-1912
200030
2360

資料室

375.9
Fu10

文部省檢定濟
大正元年十月九日　中學校國語科用

文學博士　藤岡作太郎編纂
文學博士　藤井乙男補訂

補訂 新體國語教本

東京　開成館藏版

広島大学 教 35851 図書
廣島大學圖書之印
廣島大学 教 35851 図書

巻八目次

一　韓國併合詔書……一
二　韓國の併合……三
三　國語と國家……七
四　本居宣長……一四
五　伊藤仁齋……二三
六　雪も螢も……三〇
七　小話二則……三一
八　登蓮法師……三三
九　懈怠を戒む……三七

一〇　天道……三六
一一　松の下露……三八
一二　錦の御旗……四二
一三　吉野の秋霧……四五
一四　成敗と是非……五一
一五　楓橋と寒山寺……五六
一六　ピラミッドとスフィンクス……五九
一七　雙陸……六五
一八　扇の的……六七
一九　平家の興亡……七三
二〇　待賢門の戰……八〇

二一　源三位……八八
二二　謠曲と狂言……九三
二三　攝待……九五
二四　梅花……一〇三
二五　公園……一〇八
二六　我が國の海運……一一三
二七　保守と自由……一二一
二八　ドイツの發達……一二六

廣島大學圖書之印

保障

補訂 新體國語教本 卷八

一 韓國併合詔書

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ鋭意韓國施政ノ改善ニ務メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ

時勢ノ要求

現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ增進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭然タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ擧テ日本帝國ニ倂合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ倂合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ倂合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ增進スヘク產業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈〻其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ

二　韓國の倂合

日本書紀に載せたる一傳說に據るに、素戔嗚尊の高天原を逐はれ給ふや、その御子五十猛神と共に新羅の國に降りて、曾尸茂梨といふ地に居給ひきといへり。且尊は韓土を以て

有史時代

己が子孫の治むべき地なりとなし、其處に杉、檜、櫲樟の種子を播かれたりとさへ見ゆ。少彥名命、御毛沼命亦かの土に去られきとあり。若しそれ風土記、姓氏錄、延喜式等の古書を繙かんか、必ずや中に韓國の字を冠せる神名を見出すなるべし。また疑もなく彼より我に渡來せし神々なり。これらより推す時は、日本と朝鮮とは太古その土を一域として互に相往來せし時代あるを想像せられざるにあらず。

有史時代に入りては、兩地は明かに異なる邦國として別れたりしが、任那に日本府を置き、將軍を派して之を鎭めさせ給ひし垂仁天皇の朝、已に彼我の政治的關係を現はしたり。次いで神功皇后の三韓を征服し給ひしを始め、我が國歷朝の

弱處

對韓策は常に兩地を通じて一域となさんとする意に外ならざりき。されどその關係は時と共に動搖ありしのみならず、漸くその經營にも困難を生じ來りて、欽明天皇の朝、日本府まづ廢絶し、天智天皇の朝全く意を三韓に絶ちてより、日韓合一の籌策永く委棄せらるゝに至りぬ。時宗の雄志も蒙古を導き入れし高麗を逆襲せんとし、豐公の壯圖は八道の山河を震撼せしめきと雖も、かの地併合の實は竟に擧ぐることを得ざりき。

明治六年征韓の議起り、八年江華灣の變生じ、十五年公使館襲擊の事ありしより、彼我の交涉益〻繁きを加へしのみならず、凡そ極東に於ける國際上の大事件は常にこの弱處に因

日清戰役日露戰役は……有し、…………感せしめたり

つて醸されたり。日清戰役、日露戰役は共にその起因をこの土に有し、しかも東洋の平和を保全せるがために、我が國がこの地を併せて統治すべき必要をいよ〱痛切に感ぜしめたり。されば三十八年十一月協約を結びてまづ我が保護國となし、次いで四十三年八月遂に韓國はその統治權を永久に日本に讓與したり。是に於てか始めて兩地合一の理想は實現せられ、朝鮮人も亦積衰の小邦より轉じて、祖先を同じうせる我等と共に大日本國民として世界に立つを得るに至れり。

昔八束水臣津野命は出雲乃國の狹く作られしを嘆き、いかにもして土地を補綴せんと企てし時、國の餘を新羅の岬に

象徵化

神別　皇別　蕃別　あるものの。

得給ひき、やがてその土を犂き取り、引き來りて出雲の崎に縫ひ合せ給ひきといふ。こは出雲風土記の中なる國引の故事として知らるゝものなるが、恰も韓國併合の必然なる約束を認め、之を象徵化して談れる觀あるにあらずや。

三　國語と國家

わが國民は一家族の發達して一人民となり、一人民の發達して一國民となりしものにして、神別、皇別、蕃別の名はあるものの、今日となりては、凡てこれ等を鎔化し去りたるなり。こは實に國家の一大慶事にして、一朝事ある秋に當り、われわれ日本國民が協同の運動をなし得るは、主として忠君愛

言語の一致

言語をば……と見做すに

國の大和魂と一國一般の言語とを有つ大和民族あるに因るなり。故に予輩の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の歷史と共に、一步もその方向よりあやまり退かしめざる樣勉めざるべからず。かく勉めざるものは、日本人民を愛する仁者にあらず、日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

さて一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ或は考ふる凡ての事は、皆その言語に反射し出づるなり。故に予輩は、言語拔ば、その話す人の精神上に生活する思想及び感情が化身して外に出でたるものと見做すに躊躇せず。されば予輩はマクス＝ミユラーの如く言語卽ち思想とはいひきらざれども、言語卽ち具形的思想といふに至りては、敢へて不可なきを認むるなり。

マクス＝ミユラーは近代の英國の言語學者

具形的思想

分析的能力

試に支那語を見よ。如何に仁義の道が彼等の間に行はれしかは、歷史を待たずとも言語の上に明かなり。試にサンスクリツトを學べ。如何に古代の印度人が分析的能力に富みしかは、彼等の哲學書、宗教書、言語學書等を繙くまでもなく、その語彙のみの上よりも斷言し得べし。文人國に詩歌の語多く發達し、武人國に武人の語多く繁昌す。希臘語は古代の哲學、美術の言語なり、羅甸語は中古の法律、宗教、文學の言語なり。英語の商業に於ける、佛語の社交に於ける、獨逸語の推理に

精神上の同胞

いひつべし

ことほぐ

於ける、皆それ〴〵その人民によりて發達したるものなり。

言語は、これを話す人民に取りては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を日本國語にたとへていへば、日本語は日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の國體は主としてこの精神的血液にて維持せられ、日本の人種はこの最も強き最も永く保存せらるべき鎖の爲に散亂せざるなり。故に大難の一度來るや、この聲の響くかぎりは、五千萬の同胞は何時にても耳を傾くるなり、何處までも赴いて、あくまでも助くるなり、死ぬるまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、樺太のはても、臺灣、朝鮮のはしも、一齊に君が八千代をことほぎ奉る

天堂の福音

國體の標識

生るゝや否や

國民的思考力

國民的感動力

誰かこの光を仰がざる

人生の神世

なり、もしそれこのことばを外國にて聞く時は、實に一種の音樂なり、一種の天堂の福音なり。

かくの如く、その言語は單に國體の標識となるのみにあらず、又同時に一種の教育者、所謂なさけ深き母にてもあるなり。われ〳〵が生るゝや否や、この母はわれ〳〵をその膝の上に迎へとり、懇にこの國民的思考力とこの國民的感動力とを、われ〳〵に教へこみくるゝなり。さればこの母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるものは、誰かこの光を仰がざる。

されば言語の上には、われ〳〵が心中に一日も忘れかぬる生活上の記念、特に人生の神世とも謂ひつべき小兒の頃の

頑是なし
階級

記念が、結び附きたるものと知るべし。われ〳〵が幼かりし頃、終日の遊に疲れはてて、すや〳〵眠につかんとせし折、母君は如何にやさしき聲にて、ねよとの歌をうたひ給ひしか。頑是なき小兒心に、わるふざけなどしてうち廻りし時、父君は如何におごそかに教訓をたれたまひしか。さては隣家の垣によぢて栗の實をひろふに餘念なく、或は春のうらゝかなる野邊に友どちうちつれて蓮華草などつみあるきたる、すべて當時よりつかひ來れることばは、當時の人名、當時の地名と諸共に何ともいはれぬ快感を與ふるなり。續いては小中學校の言葉、長じては學生の言葉、市民としての言葉、或は又職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ

言語は話す人を束縛す
選擇の自由

ぞれの生活をこの上に反映す。所謂言語はその話す人を束縛すとはこの事なり。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人にあらざるよりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものはなかるらん。

この自己の言語を論じてその善惡をいふは、猶自己の父母を評するに善惡を以てし、自己の故鄕を談ずるに善惡を以てするに等し。理を以てせば或は然らざるを得ざらん、去かもかくの如きは眞の愛にはあらず、眞の愛には選擇の自由なし。この愛ありて後、始めて國語の事談ずべく、その保護の事亦計るべし。

（上田萬年）

軒を列ぬ
泰斗
これこそ……鈴の屋にして

四　本居宣長

伊勢の津と山田との中間に松坂の町あり、木綿の産地として世に知られ、豪商軒を列ぬ。この地、わが國學界の泰斗たる本居宣長が生れ、住みまた死にし所にして、その家今尚存す。廣からぬ建物の二階は、僅に四疊半の、西ばかり開きたる、暑くるしき部屋なり。これこそ宣長が晝夜兀坐して學問に勵精せし鈴の屋にして、その柱に赤き緒を垂れ、緒に三十六の鈴を結びつけ、學事に倦みし時はこれを引き、鈴の音のさやさやと鳴るを聞きて鬱懷を遣りしなり。往きて古人の跡を訪ふもの、この小室のうちより不朽の大著の出でたるを思

失はれぬ。
多からぬに
産を破らんよりはとて

ひて、感奮せざるはなかるべし。

松坂の賈人は商店を江戸に有するもの多し。宣長も亦數代うち續き土地の名産を江戸に商へる木綿問屋に生れしが、若き頃、家計衰へて、江戸店は既に失はれぬ。殘れる資財も多

本居宣長

からぬに、宣長は讀書にのみ耽りて、賣買の術に疎し。累世の業なりとて嗜まぬ道に身を委ね、却つて産を破らんよりはとて、その母はかれを醫師たらしめんとす。よりて宣長は京に上

兼ねて、（豫て）
百人一首改観抄
孟浪杜撰
古典
萬葉代匠記

りて醫術を修し、その學に資せんが爲に、兼ねて漢學を學ぶ。されど青年の時より和歌を好みしが、遊學の間、偶、契沖の百人一首改観抄を見て、忽焉として洋上の闇夜に燈臺の光を望める思をなし、始めて滔々たる歌人輩の説の孟浪杜撰なるを覺れり。これより力めてかの阿闍梨の著書を求むるに、古典の學の未だ興らぬ頃なれば、萬葉代匠記の名だに知れる人も少かりしかど、穿鑿を重ね、得るに隨ひて讀み、漸く國學に心を潛むるに至れり。

滯京數年にして、鄕里に歸りて醫業を開き、終身その職に從事して渝ることなかりしが、宣長の得意とするは固より國學にあり。當時、國學には賀茂眞淵江戸に帷を垂れて、聲望方

冠辭考
轉た
渴望
眞淵縣居と號す

に揚れり。歸鄕の後、宣長その著冠辭考を得てこれを讀みしが、初は所説の餘りに新奇なるを怪しむのみ、再び三たびと回を重ぬるに從ひて次第に信ずること深く、遂に眞淵が尋常の學者にあらざるを曉り、景慕の念轉た切なり。宣長三十四歲の時、眞淵君命を受け、伊勢を經て大和、山城を旅行す。その折、松坂に宿りしを、宣長後に聞きて遺憾に堪へず、その歸路復こゝに一泊せるを待ちつけて、始めて渴望の情を癒す。これ問ひ、かれ答へて、先進大家の訓戒は、後進學士を激勵す、千歲また遇ひ難き快事にあらずや。かくて宣長は名刺を奉りて縣居の門に入りしが、二人の相會せしはこの一度のみ、その他は折々書を通はして疑を質すに過ぎざりき。

漢文もて
舞文曲筆

春秋に富む

寛政十年は二四五八年、徳川家齊の時

古事記傳

神代より始めて太古の事を記せるもの、書紀と古事記とあり。宣長謂へらく、書紀は漢文もて記して、舞文曲筆の嫌あり。昔ながらの辭を用ひて最も明かに上代の思想を露せるは、古事記なり。されど文の解し難きを以て古來これを究むるもの少く、書紀ひとり神典として崇めらる。滄溟を潛りて古傳の珠を漁るはわが務なりと、この旨を以て師に質す。眞淵曰く、余もとこの志あり、たゞ萬葉集の研究に從事して、既に年を重ぬ、日暮れて途遠く、遂に古事記に及ぶ能はず。爾幸に春秋に富めり、怠らずして余が志を繼げと。宣長意終に決し、三十五歳よりかの書の註釋に勉めて、經營慘澹たゆまず倦まず、寛政十年に至りて古事記傳全く成れり。個人の著作に

星霜
八犬傳

雙璧

すぐすぞ惜しき

して、編帙浩瀚、許多の星霜を費ししもの、曲亭馬琴が八犬傳の二十八年と記傳の三十五年と最も名あり。かくて記傳成りて、國學はこゝに堅固なる基礎の上に樹つことを得たり。世人契沖の代匠記と併せて、斯道を闡明せる學界の雙璧とす。

宣長の讀書を好むや、寸陰も黄金の如し。その詠、

春の日も早くくれぬと歎くかな、
書見る道のいそがるゝ身は。

ぬるがうちも道ゆくほども書よまで、
すぐすぞ惜しき、あたら暇を。

といへるが如き、その性癖を察するに足るべし。されどその

紙魚
獨斷の意見を演繹す
該博なる知識を綜合す
反駁
科學的態度

書を讀むや、耽讀を主として何の見識もなき、紙魚の如き學者とは選を異にす。また徒らに獨斷の意見を演繹して謬妄に陷るが如きは、その彈指するところ、多く集めて是非を較べ系統を立て、舊習に泥まず新奇を衒はず、該博なる知識を綜合してこれより不動の眞理を抽くこと、これ宣長が學問の主義なり。こゝを以て議論堅實にして的確、漫りに他の反駁を許さず。維新以前にありて秩序あり組織ある科學的態度を以て立ちたる學者は、第一に宣長を推さざるべからず。』
當時その說を排するものも少からざりしが、宣長は己の信ずるところを行ひて世の褒貶を意とせず、松坂にありて弟子を敎へ、また編述に勵めり。雲散じて月高く天下漸く知れ

名簿
享和元年は二四六一年、亦家齊の時
堂上家。障壁。牆壁
地下

を仰ぎ、終に門人の名簿に記入せらるゝもの、四十餘國、四百九十人あるに至れり。六十五歲の冬、領主紀州侯に召され、和歌山に行きて歌文を講じ、奧醫師の格にて俸祿を賜はりぬ。享和元年、宣長年方に七十二、その夏、京に上りて講筵を開く、日野一位、中山前大納言等の公卿の席に臨むもの頗る多し。從來堂上家の學を爲すや、障壁を設け慣例に拘り、因循固陋、地下の說く所は顧みんともせざりしに、今や名門鉅卿膝を屈して一庶人の敎を聽く、宣長はよく耕して豐なる秋に遇へるなり。さて鄕里に歸りて、その秋歿す。親戚門人等遺言に從ひて、松坂の南二里ばかりなる山室山の巔に葬りぬ。

元祿元年は二三四八年、德川綱吉の時

偃武

人心の窘束

神祕的迷信
歷史的謬說

摸擬蹈襲

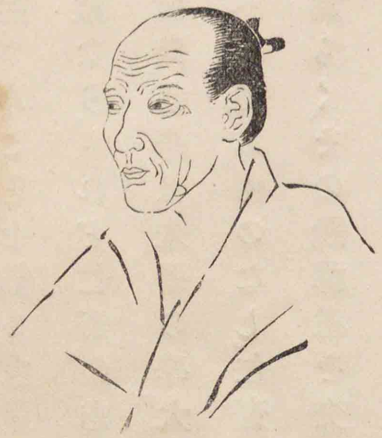
輩出

五　伊藤仁齋

元祿は文學復興の時代なり。偃武以來年漸く久しく、爲政者の勸奬と泰平の化育と相待ちて、こゝに百花繚亂たる文運隆昌の世は來れり。戰國以來晦蒙なりし人智は既に啓發せられ、幕府が慣用手段たりし人心の窘束も未だ力を逞しくせず、思想の自由なること、現代を措いてはこの時の如き世なく、社會は中世の神祕的迷信、歷史的謬說に反抗して、摸擬蹈襲の弊風を一掃せんとす。漢學に伊藤仁齋、醫學に後藤艮山、國文に僧契沖、俳諧に松尾芭蕉、小說に井原西鶴、戲曲に近松門左衞門等の人材が一時に輩出したるも、偏にこの時勢

に乘じたるなり。その中に學と德と併せ高くして、學者中の學者ともいふべきは、仁齋なり。

伊藤仁齋名は維楨、字は源佐、仁齋はその號にして、また古義堂と稱す、京都の人。その家材木を鬻ぐを以て業とせり。幼より學問を好み、精勵しばらくも息まず。十九歲の時、園城寺に遊び、湖水の漠々たるを望んで、賦して曰く、男子莫空死、請看神禹功と、病に罹りて惱むこと殆ど十年に及びしが、聊かも屈せず。家眷親類は學問を以て活計に益なしとし、醫となりて產を



伊藤仁齋

家道
儒學　朱子の學
懷疑煩悶
獨創の見
信念

起さんことを勸め、家道の日々に衰ふるを以て、督促極めて嚴なり。されど仁齋の志は確乎として變ぜざりき。

當時、儒學は朱子の學大いに行はれ、學者これを崇信して敢へて疑ふものなし。仁齋も初めその書を繙きしが、私かに以爲らく、その說禪意を交へ、私見を立てゝ、孔孟の古意に乖くことなきかと。熟讀沈思、略自得する所あるが如しと雖も、なほ自ら安んぜず、王學の書を見てまたこれを信ずる能はず、悉く宋儒の註釋を廢し、直に論語、孟子に就いて工夫し、寤寐にも求め、坐臥にも考へて、遂に獨創の見を立つるに至れり、時に年三十七八。積疑の下大悟あり、信念は巨巖の如し、意氣

意氣軒昂
眼光紙背に徹す
雞群の孤鶴
辨、辮

軒昂、揚言して曰く、愚天の靈によりて千歲不磨の學を語孟二書に發明するを得たりと。乃ち塾を堀河の居に開いて、子弟を敎授せり。

仁齋識見高邁にして、眼光紙背に徹す、その學界に崛起して雞群の孤鶴たりしも宜なるかな。讀書の法を說くに當りてや、曰く、書を讀みて識見なきは、猶讀まざるが如し。苟も識見を得んとせば、その歸宿する所を尋ぬべし。徒らに涉獵すること勿れ、外にある者の家に歸るを求むるが如くすべし。然らば一卷の書を讀めば、その一卷便ち己が用となり、十卷の書を讀めば、その十卷便ち己が用となる。數百十卷に至りても皆然り。今の書を讀むもの有用無用を辨ぜず、僻書奇編も

實踐躬行

捜索して遺すことなからんとす。數行俱に下り、積むこと數寸を以てする捷ありと雖も、その成る所を顧みるに、卒に無識見の人たりと。又曰く、學問は活道理を看んことを要す。死道理に着することを要せず。枯葉陳根、金石陶瓦は死物なり、一定して增減することなし。人は然らず、進まずば退き、退かずば進みて、一息も停ることなし。故に君子は過なきを貴ばずして、能く改むるを貴しとすと。日夜勵精進んで須臾くも息まざりし學者の氣魄想ふべし。

仁齋自ら信ずること篤く、大義の關する所は、誘ふに萬鍾を以てすといへども奪ふべからず。されどその學德行を重んじ、實踐躬行して、擧止平靜、絶えて疾言遽色なし。年猶壯なりし時、後德大寺公學問を好み、儒者を集めて討論せしむ。諸家初めは聲を和げ氣を下して辯說せしが、その旨戾るに及びては、喙を尖らして怒號す。仁齋獨り從容として終始一の如くなりき。嘗て大高坂芝山、適從錄を著して仁齋を駁せり。弟子その書を示して曰く、先生これが辯を作れと、仁齋笑つて答へず。弟子重ねて曰く、先生答へずば、余代つて論ぜんと。仁齋諭して曰く、君子は爭はず、我非ならば愼んで彼の言を聽くべし、彼非ならば、他日その誤を知るべし。學問の要は虛心平氣にして、己の爲にするにあり、何ぞ强ひて彼を毀りて我を立てんやと。されば仁齋と仇敵の如くなりし荻生徂徠も評して、熊澤の知、伊藤の行、之に加ふるに余の學を以てせば、

辯、辨

虛心平氣

熊澤蕃山

矯激

赤貧洗ふが如し

東海始めて一の聖人を出さんといへり。

仁齋資性溫厚、人に接するに誠を以てして、絶えて矯激の行をなさず。寺院を過ぎては禮拜し、節分の夜は裃を着て炒豆を撒きたるが如き、自ら高ぶりて世俗に戻ることなきを見るべし。嘗て近隣の人、力を協せて總井戸を浚ふることあり、仁齋も出でて事を共にせんとす。衆皆曰く、吾等これを爲して足れり。何ぞ先生を役せんやと。仁齋聽かず、余もまたこの井を汲むこと衆に異ならず、今獨り與らざる理あらんやといひて、遂に綱を曳きて勞を分てりといふ。

仁齋、資財固より乏しきに、講學の外に念なくして、赤貧洗ふが如し。ある時は歳暮に至りても、餅を搗かしむること能はず。その妻泣いて曰く、家計の窮迫は忍びざるにあらず、たゞ原藏未だ物も辨へずして、餅よく〳〵と求む、兒童の情も哀ならずやと。原藏は仁齋の長子にして、のち家學を繼いで盛名ありし東涯なり。仁齋机に向ひたるまゝ默して答へず、羽織を脱いで妻に與へたりといふ。困苦かくの如くなりしかども、仁齋は毫も意に介せず、その名海内に遍きに至りて、諸侯の高祿を以て聘する者あれども、辭して應ぜず、悠々として一處士を以て自ら甘んじ、諸生の誘掖を以て己が任とせり。

辨、辯

意に介せず

誘掖

その歳旦の詠に曰く、

君が代の長閑さを今朝おもふかな、
まなびの窗の春のはつかぜ。

寶永二年は二三六五年、徳川綱吉の時
及門
をり
かきなすさめそ
をのこやも空しかるべき

かくて寶永二年、享年七十九にして歿しぬ、及門の人私に諡して古學先生といへり。

六　雪も螢も

君のため民のためぞと思はずは、
雪も螢もなにかあつめむ。
（大納言師兼）

をり〱にあそぶ暇はある人の
いとまなしとて書よまぬかな。
（本居宣長）

なほざりにかきなすさめそ、鳥の跡、
人の心もみゆといふなり。
（村田春海）

をのこやも空しかるべき、萬代に
語りつぐべき名はたゝずして。
（山上憶良）

ますらを
名をし立つべし
かたりつぐがね
和漢朗詠集
時代や違ひ侍らん
さ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれ

ますらをは名をし立つべし、後の世に
きゝつぐ人もかたりつぐがね。
（大伴家持）

七　小話二則

その一

あるもの小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちきたるを、ある人、御相傳浮ける事には侍らじなれども、四條大納言えらばれたるものを道風かゝん事、時代や違ひ侍らん、おぼつかなくこそといひければ、さ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれとて、いよ〱秘藏しけり。

しるところ
いざ給へ
をがむ
かいもちひ
いきたり
ゆゑ
つと
ゆかしがる
おとなし

その二

丹波に出雲といふところあり、大社を遷してめでたく造れり。志太の某とかや、しるところなれば、秋のころ、聖海上人その外も人あまたさそひて、いざ給へ、出雲をがみに、かいもちひめさせんとて、具しもていきたるに、おの〳〵をがみて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子、高麗犬、背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや、この獅子のたちやういとめづらし、深きゆゑあらんと涙ぐみて、いかに殿ばら、殊勝の事は御覧じ咎めずや、無下なりといへば、おの〳〵あやしみて、まことに他に異なりけり、都のつとに語らんなどいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく

承らばや
さがなき
すゑ直す
いぬ
ますほのすゝき

物知りぬべき顔したる神官を呼びて、この御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らん承らばやといはれければ、その事に候ふ、さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ふことなりとて、さし寄りてすゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

（徒然草）

八　登蓮法師

一事を必ずなさんと思はゞ、他の事の敗るゝをもいたむべからず、人の嘲をもはづべからず。萬事にかへずしては、一の大事なるべからず。

人のあまたありける中にて、ある者、ますほのすゝき、まそほ

聖

蓑笠やある

雨やみてこそと

まつものかは

尋ねきゝてんや

申し傳へたるこそ……覺ゆれ

ぞ……侍るなる

のすゝきなどいふ事あり、渡邊の聖このことを傳へ知りたりと語りけり。登蓮法師その座に侍りけるが、これを聞きて、雨のふりけるに、蓑笠やある、かし給へ。かの薄の事ならひに渡邊の聖のがり尋ねまゐらんといひけるを、あまりに物さわがし、雨やみてこそと人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝものかな、人の命は雨のはれまをもまつものかは。吾も死に、聖もうせなば、尋ねきゝてんやとて、走り出で行きつゝ習ひ侍りけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたう覺ゆれ。敏きときは則ち功ありとぞ論語といふ文にも侍るなる。

（徒然草）

たばさむ

懈怠

九 懈怠を戒む

ある人、弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師の曰く、初心の人二つの矢をもつことなかれ、後の矢を頼みて、始の矢に等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へといふ。わづかに二つの矢師の前にて、一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心みづからしらずといへども、師これをしる。このいましめ萬事にわたるべし。

道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。まし

一刹那

なんぞ……

はなはだかたき。

澤庵禪師が生家の弟に與へたる訓誡の書簡。禪師の生家は但馬國出石なり

て、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞ只今の一念において、たゞちにすることの、はなはだかたき。

（徒然草）

一〇　天道

御手前萬事御才覺肝要に候。先書に何事も天道次第との御文尤に候。さる義も候へども、唯天道より金銀米錢をあたへたる事はなく候。人の才覺にて候。何事も人間の業と御心得有るべく候。天道は此方次第のものに候。世上申す天道は杳かに違ひ申し候。古今蓮の葉は圓く、松の葉は細く候。その如く我が身に應ずる天道をよくわきまへ、身を持つ所卽ち天

いはれ

人は品々に世をわたるが天道にて候

知音

道に任すと申すことに候。天道に背き、身に不似合なる振舞をする人は、一生貧乏神の責物に候。鵜の眞似する烏は水に溺れて死す。天道の罰に候。鵜は鵜、烏は烏の働、天道の本理に候。斯樣のいはれを知らずして、天道とばかり言うて、寢てゐても天道より食を與へられ候ふ樣に思ふ事、大いなる間違なり。人は品々に世をわたるが天道にて候。然るに細工人も定規なくてはならざるものにて候。人は人を定規にするがよく候。長文の體むづかしく候へども、兄弟に生き合ひ、御爲よく候へかしと此の如くに候。何とぞ風を御かへ候うて困窮せぬ樣、御分別專一に候。親類に遠ざかり、親しき知音に恨を結ぶも多分貧故に候。

後音

卿相雲客

徒跣

心だに誠の道に叶ひなば、

祈らずとても神や守らむ。

皆是にて候。尚後音の時を期し候。恐惶。

（今日の書面）

一一　松の下露

さる程に類火東西より吹き覆ひて、餘煙皇居に懸りければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、いづくを指すともなく、足に任せて落ち行き給ふ。此の人々初め一二町が程こそ、主上を扶け參らせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道闇うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別れ〳〵になりて、後には、只藤房、季

十善の天子

あさまし

羅縠

房二人より外は、主上の御手を引き參らする人もなし。辱くも十善の天子玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこともしらず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には息み、二足には立ち留り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅縠の御袖を干しあへず。とかくして夜晝三日に、山城多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も季房も三日まで食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、

逃げぬべき心地

現の夢

さしてゆく笠置（掛詞）

今はいかなる目にあふとも逃げぬべき心地もせざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、木蔭に立寄らせ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖に懸りけるを、主上御覧ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより、

あめが下にはかくれがもなし。

藤房卿涙を押へて、

いかにせん、たのむ影とて立ちよれば、

なを袖ぬらす松のしたつゆ。

山城國の住人、深須入道、松井藏人二人は此の邊の案内者な

尋ね出されさせ給ふ

所存

うたてし

りければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱なく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に怖しげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴いて、私の榮華を期せよと、仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ此の君を隱し奉りて、義兵を擧げばやと思ひけれども、跡に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からん事を憚りて、もだしけるこそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、まづ南都の内山に入れ奉る。これを聞きこれを見る人毎に袖をぬらさずといふ事なかりけり。

（太平記）

うばら
大塔宮護良親王
くひせ

一二　錦の御旗

神代の木立霧閉ぢて、
深山路遠く分け入れど、
なほも心の安からで、
雲にむせびて行き艱む。
柿の衣の袖おもく、
心さびしき御姿。
御旗も今は奪はれぬ、
覺えず溜息つき給ふ。

青壁たかく、淵くろし。
そよぐ木の葉も敵かと
うばらかきわけ、主從が
宮はくひせに腰かけて
從ふものも落ち失せぬ、
君が御代しも盡きたると、

村上彦四郎義光
うきは世なり
物こそうごけ
紅葉や落つる
すはや
つと
まなさき

木寺相撲は顧みて、
落ちめとなれば人背く、
心みじかし、人によぶ、
仰せも果てず、あれを見よ、
紅葉や落つる、鳥か又、
木の間を縫うて近づくは、
すはや敵かと立ち上る。
つとまなさきに輝きて、

義光見えず、逃げにけり、
うきは世なりと憤る。
疑ふなかれ、義士なりと、
物こそうごけ、森の蔭。
あやしと見やる霧の中、
錦の御旗ござんなき、
や、木隱れし日月の
義光御前に畏まる。

件をやとむる
旗やおく
なさ
消えば

待ちぬの仰おし返し、　御旗を待たで誰をかも、
いひがひなしと難ずれば、　途に芋瀬の關すゑて、
件をやとむる、旗やおく、　いづれ一つと迫れるに、
物の具捨つるは習あれ、　惜しきは人ぞ、いかにせん。
せん方なさにとわび給ふ　宮に御旗をさし向けて、
日月上にかゝります、　現(あき)つ御神の奇御魂(くしみたま)
宿りて此にみそなはす、　燈消えば、闇の夜に
何をたよりと君は行く。
御跡を慕ひきたる時、　莊司が勢にゆきあひぬ、

もて來しおん寶
こぞりたつ
いづちか君に背くべき
この年は延元元年(一九九六)、天皇は後醍醐天皇

擬議せず中に飛び入りて、　奪ひもて來しおん寶、
よしなき勇と宣ふか、　骨をも碎け、身をもひけ、
天つ日嗣の御記號(みしるし)を　まもらで何の命なる。
錦の御旗ひらめかば、　四方の國民こぞり立ち、
弓矢とりはぎ、よりて來ん、　春の日影の照りわたり、
御運ひらくも遠からず、　この御記號の光には、
いづちか君に背くべき、　鳥の飛ぶ果、雲ゐまで。

一三　吉野の秋霧

同十二月にしのびて都を出でましくて、河内國に正成と

いひしが一族
內侍所
源顯家、義良親王
奈良の京になん着きける
時や到らざりけん
名をのみぞとどめし

いひしが一族等を召しよせて、吉野に入らせ給ひぬ。行宮をつくりて渡らせ給ふ。內侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身に從へ給ひけり。吉野の行幸に先だちて、義兵を起す輩も侍りき。臨幸の後には、國々にも御志あるたぐひあまた聞えしかど、次の年もくれぬ。又の年戊寅の春二月、鎭守大將軍顯家卿又親王を先だて申し、重ねて打上る。海道の國々盡くたひらぎぬ。伊勢、伊賀を經て大和に入り、奈良の京になん着きける。それより所々の合戰あまた度、たがひに勝負侍りしに、同五月、和泉國にての戰に、時や到らざりけん、忠孝の道こゝにて窮り侍りにき。苔の下にもうづもれぬ物とては、唯いたづらに名をのみぞとゞめし、心うき世にも侍るかな。官軍なほ心を

空しくなりぬ
源顯信
儲の君
國にてはあらはさせ給へとなん申されし
ましまししに

勵まして、男山に陣を取りて、しばらく合戰ありしかど、朝敵しのびて社壇を燒き拂ひしより、事成らずして引退く。北國にありし義貞も度々召されしかど、上りあへず、させる事なくて空しくなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしもやむべきならずとて、陸奧の御子復東へ向はしめ給ふべき定あり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍し、陸奧介鎭守將軍を兼ねてつかはさる。東國の官軍盡くかの節度に從ふべきよしをおほせらる。親王は儲の君にたゝせ給ふべき旨申しきかせ給ひて、道の程も辱かるべし、國にてはあらはさせ給へとなん申されし。異母の御兄もあまたましましき、同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましく

おどろ〱し

ためしにぞ侍るべき

しに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば辱し。七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜をとかれしに、十日あまりのことにや、上總の地近くより空のけしきおどろ〱しく、海上あらくなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船ゆき方しらず侍りけるに、御子の御船はさはりなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風のまぎれに、東をさして常陸國なる內の海に着きたる舟侍りき。方々にたゞよひし中に、この二つの舟同じ風にて東西に吹きわけらる、末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき。儲の君に定ま

たふとく

義兵こはくなりぬ

らせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかゞと覺えしに、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましまして、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられて、たふとくも侍るかな。又常陸は元より志す方なれば、御志ある輩あひはゝらひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も次の年の春重ねて下向して、おの〱國につき侍りき。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して、曆應とぞいひける。吉野の宮には、もとの延元の號なれば、國々も思ひ〱の年號なり。もろこしにはかゝるためし多けれど、この國には例なし、されど四とせにもなりぬるにや。大日本島根は本より

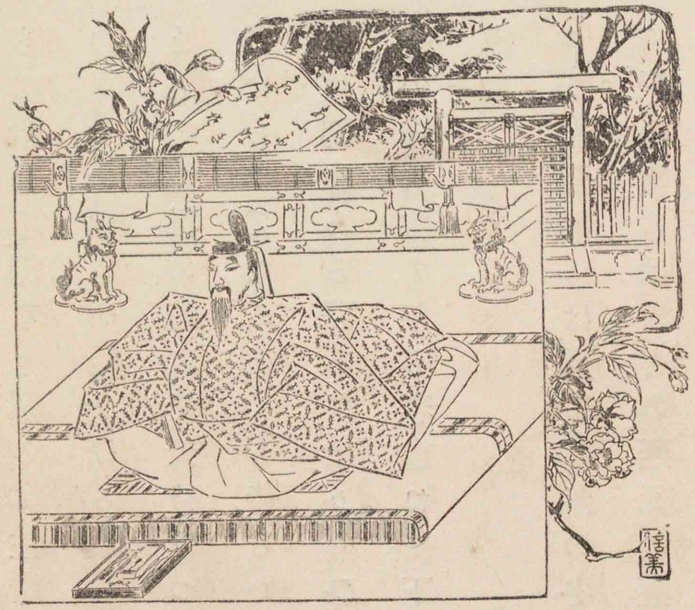
いづくか都にあらざるべき

十日あまり六日

寐るが中なる夢の世

孔子春秋を著して、哀公十四年春西狩獲麟といふに筆を止めたり

皇都なり、内侍所、神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給ひて、かくれまし〱ぬとぞ聞えし。寐るが中なる夢の世、今に始めぬ習とはしりぬれど、かずかず目の前なる心地して、老の涙も搔きあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。むかし仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りさく



後醍醐天皇と吉野御陵

神皇正統

顯さまほし

侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申しのべて、素意の末をも顯さまほしくて、しひてしるしつけ侍るなり。かねて時をも覺らしめ給ふにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す。

（神皇正統記）

一四　成敗と是非

成敗と是非とは判然別事に屬せり。成敗は當時の形勢によりて別れ、是非は後人の公說によりて定まる。若し成者皆是にして、敗者必ず非ならば、君子不遇の歎あらずして、正人雪寃を後代に望む慨なかるべし。その間かくのごとく相異な

陋見

果して幾人ありしか

行狀事迹

信仍は幸村のこと

るに拘らず、東洋の史は成るを正とし、敗るゝを邪とする陋見に出づる者多し。德川氏の大阪に勝てるは、その勝利の形勢の具れるがためにして、正邪を以て成敗の因とすべきに非ず。然れども德川氏の治世に當り、大阪、關東の興廢を記する者は、悉く大阪の擧を非として關東の行を是とし、併せて大阪諸臣の志業をも埋沒するに至れり。この時代に當りてこの陋見を脫せし者、果して幾人ありしか。

德川光圀の行狀事迹を記せる西山遺事といふ書に、左の一話を載せたり。

西山公御話に仰せられ候ふは、眞田左衞門佐信仍は東照宮へ御敵對仕り候ふ、その始より千手村正の大小を常に

崇、(祟)

調伏

卓見

身を離さずさし申し候ふ。その故は、村正の道具の當家に祟り申すといふ說を左衞門佐聞き、當家調伏の意にての事なり。士たる者は平生かやうの事にも忠義を含み、眞田が如く心を盡し候ふ事、尤に思召し候ふ。又仰せられ候ふは、石田治部少輔三成は憎からざる者なり。人各、その主の爲にすと云ふ義にて、心をたて事を行ふもの、敵なりとて憎むべからず。君臣共に心得べき事なり、云々。

この二人の行爲、許すに忠誠公義を以てすべからずとも、德川氏の世に在りて、この公評を立てし者幾人ありしか。光圀のこの言の如きは、眞に卓見と謂ふべし。

蓋し言論の自由社會に存せず、編史の業政務の一部たりし

史氏回護

高士

世に在りては、史氏興朝の爲に回護の筆を執るが故に、記事に曲筆多く、批評に公正を得難かりしなり。その積習の風を成すや、この拘束なき人が、この時期既に去りたる世に在りて筆を執りても、亦成敗と是非とを混同して、自ら曉らざる者あるに至れるは、陋と謂ふべし。この事たる唯史筆の精神に關するのみならず、人の立志に影響する所あり。

蓋し高士の期する所は、唯生前の成業に止らずして、知己を死後に俟つこと往々これあり。社會多事の時期に在りては、かくの如き場合殊に多し。而して正を持し節を守りて、その心事を天鑒に一任し、人の知ると知らざるとを顧みざるは、大人君子にして、幾ど聖賢の域に入らんとする者なり。一時

社會の節義

に屈すとも後代に伸びん事を求め、知己を千載の下に俟つ者は、その次にして、所謂豪傑の士とはこの類の人を指すなり。夫の社會の節義といふものは、實にこの徒の維持する所なるに、その當世に敗れし者は、敗れしが爲に後代に非とせられ、その成りし者は、成りしが爲に當世に容れられ、又後代に稱揚せられ、而してその成敗の由來、人物の高下に至りては、何人も之を問ふ者なからんか、中人以上の士と雖も、亦後世を俟たんとする心を失ひ、唯功業の生時に成らんことを期して、又手段の正邪を問ふもの無きに至らん。史傳の人心、社會に關すること、こゝに於てか甚だ大なる者あり。故に公正の史傳を作らんとする者は、先づ成敗を以て是非の標準

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船　張繼

元標地

驛站

寒驛

南船北馬

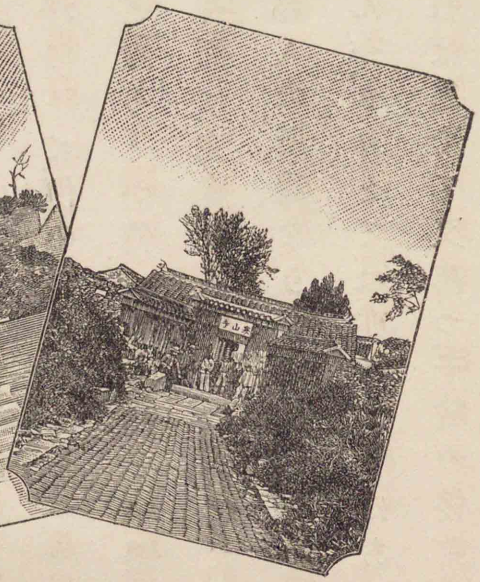
とする思想を胸中より除去せざるべからざるなり。

（島田三郎）

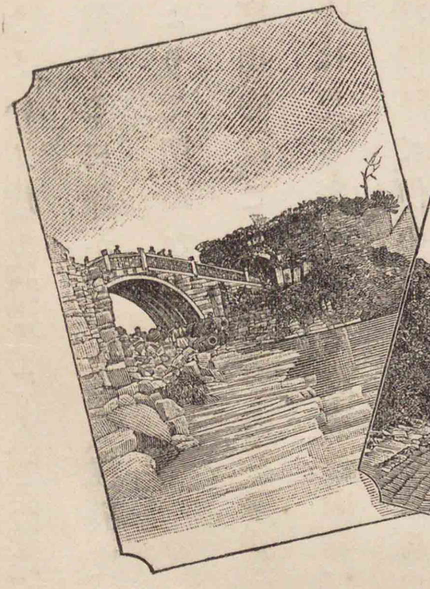
一五　楓橋と寒山寺

唐詩選中にある月落烏啼の詩によりて、その名偏く邦人の間に知らるゝは楓橋と寒山寺となり。楓橋ち、古の姑蘇、今の蘇州府の元標地ともいふべき閶門の外凡そ一里許の西方に在る一驛站にして、その町端に石造の眼鏡橋の架りたる此方に、穹窿形をなせる煉瓦の關門ありて、天下第一關門とぞ題せられたる。固より煙火蕭條たる寒驛なれども、三方よりせる運河の相會する處にして、南船北馬の諺にも知るべきが如く、行旅多く船によるを常とする南清に在りては、亦

上國への。



寒山寺



楓橋

おのづから要衝の地に當り、古より既に蘇州より上國への往還の通路なりしは、嘗て康熙、乾隆兩帝が江蘇行幸の折にも、この地より陸に上られたることとの、史に見えたるを以ても知り得べし。之より推して、白樂天、劉禹錫の如き著名なる詩人が蘇州の刺史たり

楓橋夜泊なる。。（……といふ。。）

例の詩 文徴明はわが足利氏季世頃の明代の文人

完膚なく

きといふ唐の時代にも、この地に舟船の輻湊せしことは、想像するに難からずして、楓橋夜泊なる張繼が詩題も、これによりて明かならん。

寒山寺は、この小驛の南を流るゝ運河に枕みて、古は識らず、今は見る影もなき廢寺なり。門を入りて左界を限れる壞れ墻の下に、例の詩を刻せる一碑石は建てられたり。文徴明の書なりとか傳へらるれど、字體殆ど辨ずべからざるまでに、碑面は完膚なく缺き取られたり。これはこの所を訪ひ來る邦人の所爲なりとか。古をしのぶ風流の心とはいはばいひなんが、さりとては亦あまりにあらけなきわざならずや。嗚呼日は出でて又落つ、千載の後尙昔の如くなれども、寒山寺は

知らず……

……もの有りや無しやを

荒れて狐兎の棲とならんとす。知らず、夜半の鐘聲の舊によりて客船に到るもの有りや無しやを。

一六　ピラミッドとスフィンクス

余は丘を登りて、大ピラミッドの前に立つ。約五千年の昔、埃及第四朝の王クーフーの建てし所、高さ四百五十呎、底の一側各、七百六十四呎とか。天を上にし、地を下にして、さまで大なりとは見えず。五千年の風雨を受けて、稜はやゝつぶれ、四面三角のその面は、處々缺け損じたれど、猶何時までもと言ひ貌なり。少し劣りて一基、更に小くて一基、外に王族重臣の墓と云ふいと小きもの數基。數あるピラミッドの中にて最も名

高きギゼーのピラミッド群とはこれかと、やゝあきたらず思ふ。

勸めらるゝまゝに、駱駝に搖られて、大ピラミッドを一周し、スフィンクスの前を過ぎて、こゝに撮影す。

駱駝を下りて、しばらくスフィンクスと相對す。自然の岩を刻みて、ピラミッドより更に古しと云はるゝスフィンクス、人の顔、獅子の身にて、永久に沙に匍匐す。馬鹿者の悪戯に射的の的とせられて、鼻のあたり缺け損じたれど、曩昔の面目存す。體長一百四十六呎、高さ五十六呎、面の顋より項まで二十八呎半と云へど、これもあたりの漠たる爲に、さまで大なりとも思はれず。

ベドインとは地中海の南岸に水草を逐うて生活するアラビヤ人

アルラアは回々教の上帝

沙にうもるゝスフィンクスの足下に到り、更にその肩に攀ぢ、轉じて發掘せられたる墓穴の、長さ一丈、厚さ四尺もあるべき赤花崗石もて堅固に築けるを見出でて、烈々たる日光の中に立つて四顧す。スフィンクス此方にあり、默然。ピラミッド彼處にあり、深青の空あざやかに立つ淡褐色の大三角。青天白日物象皆明かなり。あまり明かにあまり靜かにして、却つて無きが如く、晝ならぬものに對して、猶わが眼を信ずる能はず。この時、先程より附き纏ひしベドインの一人、余が服の裾牽き動かして、君が爲に運の吉凶を占はんと言ひつゝ、沙の上に太陽の形を指もて畫き始む。余曰く、否とよ、吉凶を知る者はアルラアのみと。さらばピラミッドへと彼先に立つ。

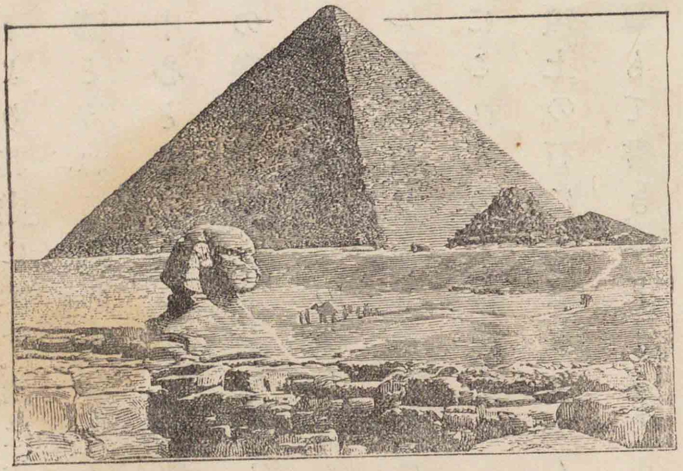
膚に粟す

それには及ばじと思へど、一人は余の左手をとり、一人は腰を押し、大ピラミッドの東南角より登る。皆堅緻なる石灰石、高さ三尺に超ゆるものあり。手をとられて跳つて登る、足がゝりは十分なり。

忽ち頭上の石に二尺ばかりの腹ふくれたる灰色の蛇あり、蜿蜒す。覺えず膽を冷す。これは無毒蛇なりとて、一人手頃の石を拾うて打ち殺せば、蛇は今呑みしばかりの蜥蜴を吐きて死す。吐かれし蜥蜴も已に死せり。これ五千年の帝王の墓の上、眼前、優勝劣敗の悲劇、生死一瞬の凄きを見て、慄然と膚に粟す。

半途に小憩して絶頂に到る、二十分を費しぬ。ピラミッドは竟

に大なり。人の手にて造られし墓の中、かほど大なるはあらじ、されど徒勞なるかな。



ピラミッドとスフィンクス

絶頂は約百坪の平面なり。額の汗を拭き、石に踞して眺む。東は生の王國、埃及のうみの親なるナイルは、今も何千何萬年の昔の如く汪々として流れ、その兩岸は麥黄に、野菜青く、棕櫚其處此處に簇生す。カイロ市はナイルの彼岸、モカタム丘の下に白く、綠樹道を挾んで、一線わが脚

波濤。とうねる

小刀して

下より其處に達す。西は死の帝國、赭白きリビヤの沙漠に、波濤とうねる丘の末、遠くサハラに通ふ。わが立つピラミッドを中心として、この沙漠の端一帶は、古今に比なき大墓地、附近の幾個ピラミッドを始として累々たる幾千載の墓、發掘せられたるあり、石の横たはるあり。眼の及ぶ所、南にはアブシール群のピラミッドあり、更に遠くサッカラ群のピラミッドあり、眞にこれ死の大帝國。

頂上の石には、旅人さまざまにおのが姓名を刻めり。余も鉛筆もて書き、ベドインの小刀して、はかなき吾が名をピラミッドの上に留めぬ。

（德富蘆花）

雙陸

悶ゆ

一七　雙陸

童子等の雙陸して遊べるを觀るに、早く上りに近づき居ながら、一つ餘りては大津へ戻り、一つ餘りては大津へ戻りして、畢竟第一の勝を占むる能はざるものあり。初めは骰子の眼の數少きをのみ得て、歩のいと遲きが、中頃よりは人なみにまで進み、終には一飛に上りに到るあり。又始より終まで先んじもせず、後れもせで、中ほどの勝を得るもあり、勝てば誇り、負くれば泣く兒あり、勝てば上品に笑を含み居れど、負くれば言葉なくなりて、ひそかに憤り悶ゆる兒あり、正しからぬこととしても勝たんとするあり、他の正しきをまで正し〜

誣ふ
かしがまし
團欒
計校
時の前に畏る

あらぬことまてもせしやうに誣ひ詈りて、一人かしがまし
く騷ぐあり、仲よき同士援け合ふあり、仲惡しき同士おとし
めあふあり、運不運、巧不巧、是不是、德不德の噂などその團欒
中にはいとむつかしげなり。されど傍觀者よりみれば、その
中の紛々たる言說の有無に拘らず、意志感情の如何にかゝ
はらず、眞の勝敗をも眞の曲直をもいと容易に知ることを
得て、論議をも要せず、計校をも要せず。人の人を觀るは、雙陸
して遊べる童子の同じ遊せる童子を觀るが如し。大人の傍
觀する如くに我等を見るものは時なるべし。人の前に畏れ
ざらんよりは、時の前に畏れんかな。人の前に誇らんよりは、
時の前に誇らんかな。

（幸田露伴）

平家を背く
尋常に飾る
あれはいかに
皆紅の扇
枻

一八　扇の的

さる程に阿波、讚岐に平家を背いて、源氏を待ちける兵ども、
あそこの峰こゝの洞より、十四五騎、二十騎打連れ〳〵馳せ
來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れ
ぬ、勝負を決せじとて、源平互に引退く所に、沖の方より尋常
に飾りたる小舟一艘汀へ向ひて漕ぎ寄せ、渚より七八段に
もなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、
船の中より年十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に紅の袴
きたるが、皆紅の扇の日出したるを船の枻(せがい)に插み立て、陸へ
向ひてぞ招きたる。

矢面
射落させん。
射させらるべうもや候はん
小兵

判官後藤兵衞實基を召して、あれはいかにと宣へば、射よとにこそ候ふらめ、但し大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれをもて射落させんとの謀とこそ存じ候へ、さりながら扇をも射させらるべうもや候はんと申しければ、判官、御方に射つべきものは誰かあると問ひ給へば、手だれども多う候ふ中に、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にては候へども手はきいて候へと申す。判官、證據はいかに。さん候ふ、かけ鳥などを爭うて、三つに二つは必ず射落し候ふと申しければ、さらば與一呼べとて召されけり。

與一その頃はまだ二十ばかりの男なり、褐に赤地の錦を以

いろふ
ぬための鏑
いかに與一見物せさせよ
御弓矢の瑕

て大頸、端袖いろへたる直垂に、萠黃縅の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四指いたる切文の矢負ひ、薄切文に鷹の羽割り合せて、矧いだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。滋籐の弓脇に挾み、兜をば脫いで高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかしと宣へば、與一仕るべしとも存じ候はず、これを射損ずるものならば、長き御方の御弓矢の瑕にて候ふべし、一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候はんと申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて、西國へ向はんずるものどもは、皆義經が下知を背くべからず、それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾く〳〵鎌倉へ還らるべしとぞ宣ひけ

さ候はば　歩ませけり。　頼もしげ

る。
與一重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、さ候はば外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば、仕りてこそ見候はめとて、御前を罷り立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘りたりけるが、弓取り直し、手綱かきくつて、汀へ向ひてぞ歩ませける。御方の兵ども、與一が後ろを遙に見送つて、この若者、一定仕らうずると覺え候ふと申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶扇のあはひ七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風

くつばみ　射させて給はせたまへ　外させ給ふな　射よげ

烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏くつばみを並べてこれを見る、何れも〳〵はれならずといふ事なし。

與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光の權現、宇都宮、那須の湧泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させて給はせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ返さんと思召さば、この矢外させ給ふなと、心の中に祈念して、目を見開きたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなりたりけれ。

……といふ條
浮きぬ沈みぬ
専權や久し

與一鏑を取つて番ひ、能つ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家、舷を敲いて感じたり、陸には源氏、箙を敲いてとよめきけり。

（平家物語）

一九　平家の興亡

平安朝の歴史を見るに、藤原氏の専權や久し。春日の神威炫燿として、この氏神を拜するものにあらずば權門に列するを得ず。源平の諸氏多くは一代にして勢を失ひ、諸國の受領となりて、徐ろに地を耕し兵を養ふに過ぎず。されど泰平數百年、藤氏の一族遊惰に流れ宴樂に耽りて、政務も兵事も卑しとして顧みざれば、都鄙睽離して、朝廷の命令は地方に及ばず、邊地に叛亂ある時は、源平二氏の力を借りて之を鎮壓す。白河法皇が北面の侍を置きたまひし頃より、武士も漸く洛中に跋扈するに至り、保元の亂は皇儲册立の紛擾と藤原宗家の軋轢と相縁りて起れるが、事實は源平が武力の爭闘となりぬ。月卿雲客の無能はこゝに暴露し、從來その膝下に雌伏したりし武士は、飜りて之を木偶視し、その養成せる兵

受領
都鄙睽離
北面の侍
月卿雲客
木偶視す

力によりて自家の威を恣にす。藤原氏は衰へて平氏は起てり、平氏を率ゐて起てるは平清盛なりき。

平清盛

清盛は藤氏の權力を破却し、己の一門を以てこれに代らんとせり、卽ち武士の代表者として公卿の團體に當れるなり。その爭は個人の爭にあらずして、階級の爭なり。空名は實力の敵にあらず、清盛は鐵拳を振うて奮鬪し、藤氏を抑壓し、源氏を牢籠し、莊園を

一嘑にだも値せず
傍若無人
歴史の桎梏
落魄
昵近
昇殿

沒收し、寺院を劫掠し、從來の典故迷信は一嘑にだも値せずとす。伊勢大廟の神領に課稅し、重衡をして東大、興福の大伽藍を燒かしめたるが如き、常人の戰慄するところも之を斷行して憚らず。傍若無人に馳驅して、一切の歴史の桎梏を破壞する樣、極めて悲壯なる觀あり。天人呆然として爲すところを知らず、暫くは手を束ねてこの巨人の橫行に任す。

初を尋ぬれば、その父忠盛は都の住居も疎々しく、久しく伊勢に落魄し居りしが、鳥羽法皇に昵近し奉りて、やう〳〵昇殿も聽されしかど、宮廷を立ち慣せる人々に殿上の交をも嫌はれて、伊勢瓶子は酢瓶なりと囃されし人なりき。その子として、清盛は十四五までは敍爵をだに賜はらず、柿の直垂

青雲に乗ず

鼻息を仰ぐ
辣腕無碍

歷史の力は偉大なり

に縄緒の下駄はき、受領の鞭を取りて、朝夕都大路を通ひしかば、京童は嘲りて高平太とぞ笑ひたる。それを恥づかしとや思ひけん、扇さし隠し、骨の間より鼻を出して通りしかば、京童がまた先を切り、高平太殿が扇にて鼻を挾みたるぞやとて、それよりは鼻平太〲と呼ばれしぞかし。さるを一朝青雲に乗じて、位人臣を極むるのみならず、一門いづれも榮華に誇りて、平家にあらずば人にあらずといひ、君臣上下唯その鼻息を仰ぎ、その機嫌に違はざらんとす。辣腕無碍、清盛は能く舊時代を打破して新時代を建設し得たるが如し。然れどもこれその表面のみ。

陽に舊時代を破れるもの、陰には之に破られたり、歷史の力

熊谷直實

は偉大なり。新興の武士は學問もなく、文藝もなく、これを學ばんとして汲々として舊公卿の跡を追ふ。日常の作法、公事の儀禮に於ても、藤氏は依然として師表の地位にあり。平家の一門のうち、重盛は殿上の交際に慣れたる第一の人なり。經政は竹生島に琵琶の祕曲を彈じて神明を感ぜしめ、忠度は都落の馬を返して、撰者の門に家集を捧げぬ。一の谷の城樓、波の音にまがふは、敦盛が青葉の笛に興を遣るならずや。寄手の熊谷は涙を流して、かゝる亂の世の中に、龍吟鳳鳴の曲を調ぶることのやさしさよと泣きぬ。羨むものは幸にして、羨まるゝものは不幸なりけり。平氏が詩歌管絃に堪能なるは、卽ち武士の特色を失墜せるなり。清盛獨り巍然たりとて

後塵を拜す

危機一髪

紈袴の子弟

藻屑と沈みぬ。花と咲き花と散る

盧生がおのれ榮達したりと見し

も、流行を追うて趨る門流の傾向を如何せん。

平家は公卿を蹂躪したるが如くにして、その實かれらの後塵を拜し、剛健の俗忽ち婉柔の風に化したり。この時、精悍なる地方の武士が暴風の如く襲來することあらば、管絃和歌の威德を以てこれを退くべしや、危しとも又危からずや。果せるかな、高倉宮の令旨を奉じて、諸國の源氏群蜂の如く起ち、危機一髪の際、清盛は熱病に罹り、後事を慮りながら薨じぬ。紈袴の子弟如何ぞ坂東、木曾の暴し男に敵すべき。義仲の襲擊に都を落ち、範賴、義經の追躡に四國、九州を漂ひたる果は、一門擧つて西海の底の藻屑と沈みぬ、花と咲き花と散りし平家が二十年の榮枯盛衰顧みれば盧生の夢なりけり。

は夢なりきといふ支那の故事

皮相の見

軟化

過渡時代の犧牲

焦點

されば平家の一門が、源氏を破りて興り、源氏に負けて亡びたりといふが如きは、表面の成敗によりて論を立てたる皮相の見のみ。清盛は部下の兵を率ゐ、新進の力を以て舊來の俗を倒さんとしたり。かくして獅子奮迅の勢を以て驀進せしが、結果は希望の如くならず、禍蕭牆のうちに起りて、親族まづ軟化し、反抗の聲盛んに湧き、遂に一身一門を以て過渡時代の犧牲に供し了んぬ。上流と中流との爭、文藝と兵事との爭、習慣と本能との爭、すべてこれらを一括したる大いなる爭の衝に當り、その渦中に浮沈して平家は滅びたり。清盛は卽ちこの爭の焦點たりしものにして、社會の大事變をその一生に體現したるなり。

櫨匂
置かせて
開かれたり

二〇 待賢門の戰

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を帶き、切文の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄鴾毛なる馬に柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり、敵を平げんこと、何の疑かあるべきとて、三千餘騎を三手に分けて、近衛、中御門、大炊御門、大宮面へ打出でて、陽明、待賢、郁芳門へ押し寄せたり。

大內には三方の門を鎖し固め、東面をば開かれたり。昭明、建

見えられつ
引き寄せさせたり
逸物

禮の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬ども多く引き立てたり。梅壺、桐壺、籬壺、紫宸殿の前後、東光殿の脇の壺まで、兵ひしと竝び居たり。皆源氏の勢なれば白旗三十餘流打立てたり。大宮面には平家の赤旗三十餘流さし揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大內も響き渡りて夥し。

鯨波に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顏色變りて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝戰ひて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと引き寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心にも似も似ず逸り切つたる逸物なれば、つと

舍人
放たば天へも飛びぬべし
臆したりな。

出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし、穆王八匹の天馬も斯くやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へとて押し揚げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乘り越して、伏し樣にどうと落つ。急ぎ引き起して見れば、顏に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は臆したりなとて、日華門を打出でて、郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

僻目
破られつるぞや
驅けられけり

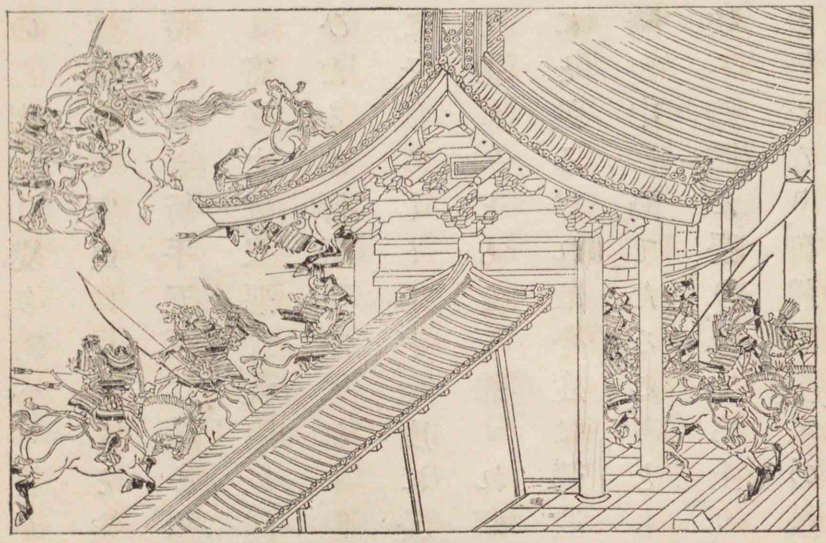
左衞門佐重盛五百餘騎をば大宮面に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、よばはり給ひけるは、この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か、斯く申すは、桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛の嫡子、左衞門佐重盛、生年二十三と名のり懸ければ、信頼返事にも及ばず、それ防げ、侍どもとて引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、われ先にと迯げければ、重盛彌、勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。

義朝これを見て、惡源太はなきか、信頼と云ふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや、あの敵追ひ出せと宣ひければ、承り候ふとて驅けられけり。續く兵には鎌田兵衞、後藤兵衞等十七騎、轡を竝べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、この手の大

目な懸けそ
乘つたるこそ
重盛よ
組ませじ
百騎ばかりが

將は誰人ぞ、名のれ、聞かん。斯く申すは、淸和天皇九代の後胤左馬頭義朝の嫡子、惡源太義平と申す者なり。生年十五歲、武藏大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしより以來、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歲、見參せんとて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、縱様横様、十文字に敵をさつと蹴散して、端武者どもに目な懸けそ、大將軍を組んでうて。櫨匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黃鴾毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。おし雙べて組んで落ち、手捕りにせよと下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門、新藤左衞門を始として百騎ばかりが中にぞ隔てける。惡源太を始と

息を繼がせ給ふ
平將軍貞盛



待賢門の戰

して十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まん〳〵とぞ揉うだりける。十七騎に驅け立てられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮面へさつと引く。大將左衞門佐は弓杖ついて、馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、曩祖平將軍

向う樣に響め奉る

以前こそ洩らししかど

百餘騎が

敵には誰か嫌はん

の二度生れ變り給へる君かなと、向う樣に響め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻め寄せたり。又惡源太驅け向ひ、見廻して言ひけるは、只今向ひたるは皆新手の兵なり、但し大將は元の大將重盛ぞ、以前こそ洩らししかど、今度に於ては餘すまじ。おし雙べて組んで捕れ兵ども、と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、今度は難波次郎、瀨尾太郎を始として百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太弓をば小脇にかい挾み、鐙踏ん張り、つ立ち上り、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり、敵には誰か嫌はん、寄れ

五百騎が中

あ驅けたり

や、組まんと言ふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下を追ひ廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮面へ引いて出づ。

惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖ついて、馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵度々驅け入るらめ、あれ速に追ひ出せと言ひ遣されければ、俊綱馳せてこの由を言ふに、承り候ふ、進めや、者どもとて、色も變らぬ十七騎、大宮面に驅け出でて、敵五百騎が中へ面も振らず割つて入る。引きたちたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、わが子ながらも義平は能く驅けたるものかな、あ驅けたりとぞ譽

保元元年は一八一六年、平治元年は一八一九年

あるにかひなき思

月の出で入り雨雪の降るに

められける。

二一　源三位

保元、平治二度の亂に源氏の一門大方は滅び、僅に殘れるものも朝日の前の露かとばかり哀なりけり。兵庫頭賴政は攝津守賴光が五代の孫にして、弓馬の達者なりしかども、さして世に用ひられず、あるにかひなき思をせめては和歌に慰めぬ。和歌は生來好める道にて、月の出で入り、雨雪の降るにつけても、心を潜めずといふことなし。久しく大內の守護として、地下に留りければ、

人知れぬ大內山のやまもりは、

いで來べきにかあらん

出でて返らぬ宣旨

晝だにも

雨さへ

冥加

木がくれてのみ月を見るかな。

と述懷の歌を詠ぜしが、その後やうやく昇殿を許されぬ。

一年、內裏の上に當りて鵺の鳴くことあり。いかなる事のいで來べきにかあらん、怪しきことかなと僉議ありて、賴政を召して射させらる。出でて返らぬ宣旨なれば、畏りぬとはいひながら、晝だにも小き鳥のねらひ難きに、五月闇の雨さへ降るをいかゞせん。射損ぜば一生の恥、弓箭の上に冥加あらせたまへ、八幡大菩薩と念じ、聲を尋ねて矢を放つ。手ごたへありて鳥は落つ。主上を始めまゐらせて、人々感歎いふばかりなし。後德大寺左大臣承りて祿を賜ふとて、

時鳥名をも雲ゐにあぐるかな、

弓はり月のいる（掛詞）

嗷訴

作者なるを

とあるに、頼政とりあへず、

弓はり月のいるにまかせて。

とつけたりとぞ。

又ある時、山門嗷訴のことあり、大衆は日吉山王の神輿を振りて内裏に向ふ。まづ達智門を志して來るに、こゝには頼政郎黨を率ゐて警固の任にあり。大衆計らひて、この人は年頃山王の信仰篤く、かつは優しき風月の才人ぞかし、

深山木のその梢とも見えざりし

櫻は花にあらはれにけり。

と世に聞えたる歌の作者なるを、情なく刃を向くなとて、やがて他の口へ向ひぬと傳ふ。同じ花の歌に、

來る音すなり

椎（掛詞 但し椎は「しひ」四位は「しゐ」

後白河法皇

得堪へず

花さかば告げよといひし山守の

來る音すなり、馬に鞍おけ。

といへるも、この人の詠なり。

頼政文武の名は高けれども、立身はかばかしからず、年は七十に餘りて尚四位に留りしかば、更に懷を和歌によせて曰く、

のぼるべき便なければ、木のもとに

椎をひろひて世をわたるかな。

相國清盛その老衰を憐み、奏請して從三位に敍したり。されど平家は暴横年々に甚だしく、遂には法皇をさへ幽閉しまゐらせぬ。頼政憤に得堪へず、朝家の禍、一門の恥、今はたゆた

治承四年は一八四〇年

射させぬ

みのなる（掛詞）

ふべきにあらずとて、治承四年、法皇の第二の皇子高倉宮を勸め奉りて、平氏追討の令旨を諸國に申し下す。謀中途に漏れて、敵にそのかまへあれば、心ならずも宮を奉じて三井寺に赴き、更に南都に向ふに、平家の軍勢はや雲霞の如くに迫り來る。さればとて兵を平等院に留め、宇治川を前に當てて對ひ戰ひしかども、衆寡敵せず、一門多くは討たれぬ。己も膝を射させぬ。宮を落しまゐらせて、防ぐ程の手は盡しぬ。身は六代の君に仕へ、齡は八旬に近し、義兵を擧げて命を捨つるは武士の幸ぞやとて、心閑かに最期の言を書き遺す。

埋れ木の花さくこともなかりしに、
　みのなる果ぞあはれなりける。

始としてなん……ける

足利三代將軍は義滿、金閣を起せり。その第八代は義政、銀閣を起せり

向上

水墨畫
香道
茶道

かくて頼政は自害して果て、宮も流矢に中りてうせたまひしかども、これを事の始としてなん諸國の源氏は競ひ起りて、遂に平家を滅しける。

二二　謠曲と狂言

室町時代の文學中最も偉觀なるは謠曲なり。三代將軍の世は足利氏の權力の最も伸びたる時にして、又最も平和なる時なりき。されば文學美術もこの頃より漸く向上の運に向ひ、第八代の時應仁の亂は起りたれども、銀閣を起せる東山將軍の胸中には、金閣の主にも勝りて風流文雅の嗜好あり。水墨畫の發達もこの間に遂げられ、香道茶道も起り、蒔繪陶

散樂の能
田樂
曲舞
習氣

器なども新機軸を出せり。この氣運に伴ひ、義滿の時より義政の時にかけて盛んなりし一種の舞曲あり、その舞は能樂にして、その曲は卽ち謠曲なり。能樂委しくは散樂の能といふ。散樂は古來多く神事に用ひし一種の伎樂なり。之に田樂、曲舞等の長所をも取り入れて融和大成せるもの、卽ち今日に行はるゝ能樂なり。

これよりさき禪宗の行はるゝこと漸く盛んにして、支那の文物來往の僧侶によりて傳へられたるもの少からざりしが、義滿新に明國と交を修し、彼我の外交頻繁を加ふるに及びて、その影響愈甚だしく、いつしか繪畫に宋元の水墨の浸潤せしが如く、文學にも彼の國の習氣をうけたること多し。

傳奇雜劇
狂言
主人公
誇張過大の脚色
人の頤を解く
篠懸の露けき（掛詞）
雲居の月をみ
ねの雪（掛詞）

謠曲もこの一例にして、我が國古來の文學を綜合打成せることはいふを待たざれども、また彼の傳奇雜劇いはゆる元曲に則るところありしなるべし。

能樂の餘興として、その間に挾み行ふものに狂言あり。嚴格典雅なる能樂に對して、滑稽通俗を旨とし迂愚なる大名を主人公としてその失策を寫すなど、よく人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色に人の頤を解かしむ。

二三　攝待

旅の衣は篠懸（すゞかけ）の露けき袖やしをるらん。子に臥し寅に起きなれて、雲居の月をみねの雪、その松島に參らんと、東路さし

攝待と候ふ。

鶴の子の松に歸らぬ。（掛詞）

かつう。

て急ぎけり。辨慶 いかに申し候ふ、まづこの所に御休ゐらうずるにて候ふ。や、これに高札の候ふ、なに〱佐藤の館に於て山伏攝待と候ふ。やがて御着き候へ。兼房 佐藤の館に於て山伏攝待の事は、吾等が望む所なれども、佐藤の館が憚にて候ふ程に、御通りあれかしと存じ候ふ。辨慶 これは仰にて候へども、唯知らぬやうにて御着あらうずるにて候ふ。

母 いかに鶴若。鶴若 何事にて候ふぞ。母 山伏達は幾人御着あるぞ。鶴若 十二人御着候ふ。母 かしまし〱。舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬ淋しさよ。げにや憚ある身として、御前に參りて候へば、かつうは亡き人の名をもくだし、又は子どもの古の恥をも顯すにては候へども、餘りに御なつかしき心

ばかりにて、御前に參りて候ふなり。これは故佐藤莊司が後家繼信、忠信が母にて候ふ。げにや親子恩愛の別れのあまりには、包むべき人目をも知らず、又は憂き身の恥をも顯すにては候へども、さりながらこの攝待と申すは、現世の祈の爲にも非ず、後世善所とも思はず。嫡子繼信は八島にて討たれ、弟忠信は都にて

心や慰む

そにて

さこそわが君も哀と思召すらめ

などや弔の御言葉をも出されぬ

失せけるとばかりにて、委しき事をも知らずして、ひとり悲しむ身を知る雨の、霽れぬ心や慰むと、この攝待を始めて候ふ。札を立ててより以來一日に五人、三人、乃至一人、二人絶ゆる事はましまさねども、十二人はこれが始にて候ふ。いづれがわが君ぞ、いづれがそにてましますぞ。夜も更けたり、人の知るべき事にもあらず、この姥が耳にそと御教へ候はば、此の攝待の利生にて、地空しくなりし兄弟を、再び見ると思ふべし。親子よりも主從は深き契の中なれば、さこそわが君も哀と思召すらめ。殊更御爲に命を捨てし郎等の、ひとりは母、ひとりは子なり。などや弔の御言葉をも出されぬ。かほど數ならぬ身には思のなかれかし。あら恨めしの憂き世や。

何をか隱し申すべき

子供の事こそ思ひ出でられて候へ

いづれか實にて候ふやらん

門脇殿は平教盛

辨慶 今は何をゝ隱し申すべき、わが君にて御座候ふ。近う御參りあつて御目にかゝり申され候へ。母 あら有り難や候ふ。わが君を拜み參らするにつけて、子供の事こそ思ひ出でられて候へ。繼信が八島にての最期の有樣、剛なりとも申し、又不覺なりとも申す。いづれか實にて候ふやらん、承りたく候ふ。判官 いかに辨慶、繼信が最期の樣を委しく語つて、老尼に聞かせ候へ。辨慶 畏まつて候ふ。扨も八島の合戰、今はかうよと見えしに、門脇殿の二男能登守教經と名乘つて、小船に取乘り、磯まぢかく漕ぎ寄せ、いかに源氏の大將源九郎義經に矢一筋參らせん、受けて見給へと罵る。かう申す各、を始として、皆御矢面に立たんとせしが、

これに在りや。
押付　總角
たんだ

何とやらん心おくれたりし所に、繼信は心まさりの剛の人にて、御馬の前にかけ塞がつて、義經これに在りやとて、につこと笑ひて控へたり。扨その時に教經は引き設けたる弓なれば、矢坪を指してひようと放つ。過たず繼信が着たりける鎧の胸板、押付、總角かけずたまらず、つゝと射通し、うしろに控へ給ふわが君の御着背長の草摺にはつたと射留む。扨その時に繼信は馬の上にて乘り直らん〱とせしかども、大事の手なればこらへずして、馬より下にどうと落つ。やがてわが君御馬を寄せ、繼信を陣の後ろにかゝせ、いかに繼信、いかにいかにと宣へども、たんだ弱りに弱つて、終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候ふ。

綿嚙
忠信こそ取つて候へ。

母　扨その時に弟の忠信は候はざりけるか。辨慶　あら愚や、忠信は日の下に於て隱れましまさず、能登殿の童菊王丸繼信が首を目懸け、渚の方に走り渡るを、忠信引いて放つ矢に、菊王が眞中射通され、かつぱと轉べば、教經船より飛んでおり、菊王が綿嚙つかんで、遙の船に投げ入れ給へば、程なく船にて空しくなる。眼前兄の敵をば弟の忠信こそ取つて候へ。扨は敵も大將に仕へ申しし御童、辨慶　繼信は又わが君の祕藏におぼしし御內の人。母　彼は平家の船の內、辨慶　此方は源氏の陸の陣。母　彼も主從。辨慶　此も主從。母　思は同じ思なれば、辨慶　よそのなげきを思ひ合せて、御慰みも候へとよ。母　それは仰までも候はず。御身代りに立ち參らする上は、今世、後世

いかゞは嬉しかるべき
何か惜しからん
討たせつゝ

の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し、御笈をも肩に懸け、この御座敷にあるならば、地十二人の山伏の十三人も連りて、只今見るならば、いかゞは嬉しかるべき。

その時義経老尼に語り給ふやう、八島にて繼信今はかうよと見えし時、思ふ事あらば、委しく言ひ置けと、くれ〲尋ね問ひしに、繼信その時に息の下より申すやう、弓矢取る身の御身代りに立つ事、二世の願や三世の御恩を少し報謝する、命の輕き身は露塵何か惜しからん。さりながら故郷に、八旬に及ぶ母と十に餘るわらんべ、これ等が事の不便さぞ、少し心にかゝる雲の、月に覆ひて光も闇くなる如く、そのまゝくれぐれと、終に空しくなりにけり。判官かやうに郎等を討たせつゝ、地自ら手を碎き、忠勤まこと曇らずば、終に治る世に出でて、繼信、忠信が子孫を尋ね出して、命の恩を報ぜんと、思ひし事も空しく、吾さへかゝる姿にて、その名をだにも名乘り得ぬ憂き身の果ぞ悲しき。

果ぞ悲しき
とまるや涙なるらん

さる程に、夜もほの〲と明け行けば、暇申して客僧ははやこの宿を立ちければ、母跡追ひ出づる鶴若を老尼は泣く泣く抱き入れ、地行くは慰む方もあり、とまるや涙なるらん。

（謡曲攝待節録）

二四　梅花

固陰沍寒、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く標致するものは梅花にして、菊花の行く秋に後れて凋むと共に、高

高節遙に群芳を拔く

茅舍竹籬

節遙に群芳を拔く。牡丹は貴客、梅は隱士、彼は金屏を廻らし、七寶の花瓶に插みて見るべく、此は茅舍竹籬、牛の聲する邊に尋ぬべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨は薔薇に比して別に特長あり。冷艷玉を綴つて疎々たり、老幹龍を橫たへて槎枒たり。清風雅韻、百花の魁たるもの、この花を措いて何かある。

支那の文人は酷だ梅花を好めり。三國の末、陸凱といへる人これを江北の友に贈つて曰く、

折梅逢驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春。

宋の時、林和靖西湖の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へり。屢舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至れば童子鶴を縱つてこれを報ず。

絕唱

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ　凡河內躬恆

人はいさ心も知らずふる里は花ぞ昔の香ににほひける　紀貫之

いさ　いざ

その梅を詠じたる句に、疎影橫斜水清淺暗香浮動月黃昏といへるは、梅花詩中千古の絕唱と稱せらる。

わが國に於ても、既に萬葉、古今の歌集に梅花の詠多し。百磯城の大宮人は梅を插頭して野邊に遊び、わが宿の梅咲きたりと告げやれば、好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に、色こそ見えね、香やは隱るゝと稱へ、或は昔ながらの花を見て、人はいさ心も知らずと危めり。菅原道眞十一歲にして月耀如晴雪、梅花似照星と賦し、のち太宰府に左遷せられ、將に家を出でんとして、庭前を眺めて曰く、

こちふかばにほひおこせよ梅の花、
あるじなしとて春を忘るな。

いざ、いま

藤原公任また幼にして宮中に候して、

しら〳〵としらけたる夜の月影に、
　雪かきわけて梅の花をる。

と詠みければ、主上深く叡感ましまし〳〵、公任もまた生涯の思出この時にありきといへりとぞ。

傳へていふ、前九年の役、安倍宗任捕虜となりて京師に入れるに、卿相雲客、奥の夷のさこそ無骨なるらめ、いざ戯れて笑はんとて、一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず、

わが國の梅の花とは見たれども、
　大宮人はいかがいふらん。

しらく

烈公は德川齊昭

と答へたるに、一座しらけて恥ぢ入りぬとなり。源平の亂、生田の森にて、梶原景季片岡の梅の盛なるを手折り、箙にさして奮戰せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も御方もやさしき武士の振舞かなと感じけりとかや。

梅が香や、隣は荻生惣右衛門。

とは、元祿の頃、其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩へて賛したるもの、

梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ。

とは嵐雪が窓前の南枝に日々の春を占へるなり。水戸の烈公が梅を植ゑしとぞ、偕樂園は今に關東の名園となり、齋藤拙堂が記勝に寫されしより、月の瀨は櫻の吉野と竝べ稱せら

見得たり瓶中の芳姿

る丶に至りぬ。

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘聲霜に冴ゆ。一陣の暗香に驚いて顧みれば、見得たり、瓶中の芳姿。これ晝間の散策に、竹外の一枝を手折りもて來し家づとなりけり。

二五　公園

公園は都府の肺臓なり

公園は都府の肺臓なり。故を吐き、新を納るゝ肺臓の人身に至要なるが如く、腐を轉じて鮮に化する公園の都府に必要なるは言ふまでも無し。本來、都府は繁昌すればするほど、自然の狀態に遠ざかり行くものなれば、從つてその住民を人

元氣を銷耗せしむ

人間を困憊せしむ

事の複雜なる組織の中に繋定し、その天眞の元氣を銷耗せしむると共に、物質的には空氣の混濁甚だしき不自然境を現出して、その中に生息する人間を困憊せしむるなり。かくの如き市中に、樹木蓊茂し、草竹叢生せる閑地の存在するは、物質的の不良の狀態を救ひ、精神上の鬱抑を醫し、空氣の代謝をなし、元氣の振作をなす、その效實に測るべからず。公園はこの必要に應じて、都府に設置せらるべき者にして、都府の大且盛なるを加ふるに從ひて、公園の數も多く、又その設計も良好の度を加へんことを要す。

都府をして長く老朽せざらしめ、都民をして常に活潑に勞作せしめんと欲せば、勢、完全なる公園を多くして、樹木草竹

繫縛

を植ゑ、又娛樂の具を備へ、暫く自然の懷裏に人事の紛綜せる繫縛を脫する處とし、都內の人民をして、その職業の餘暇を以てこゝに散策し、勞を醫し氣を養ふ習慣をなすに至らしむべきなり。些少の時間と些少の金錢とだにあらば、便ち飮食店に走り入りて、口腹の欲を恣にするが如き惡習慣は、屋外に適當の勞を醫し氣を養ふ地なきこと、その有力なる原因の一たること疑なければ、この缺點を除き去り、換ふるに、公園內の遊戲逍遙の如き、健康平和の因をなすに足るべき習慣を與へんことは、道德上にも、衞生上にも、はた經濟上にも、萬利あつて一害なき企圖なりとす。常に郊外に住居し、自然に接近する人民は、放任し置くとも、おのづから淸潔なる空氣と鮮麗なる日光とに浴すべき機會多けれど、都門繁華の地に住する人民には、かゝる機會は大雪後の快晴を除きては殆ど無しと謂ふも可なり。かくの如き人民に對して公園の設備の缺くべからざるや、固より論なきなり。

惟ふにわが都人士は、古來適當なる公園を有せざる爲と、運動步行に不便なる衣服を着け居る爲との故にや、甚だしく戶內に蟄居することを悅ぶ習慣ありて、恰も竈の傍の老猫、冬の日の蛇の如き觀あり。蓋し戶外に逍遙するを悅ぶと、室內に蟄居するを愛すると、一は陽性の事たり、一は陰性の事たり、一は良好の空氣、日光に接して自然に近づき、一は良好

境を轉ず

醉生夢死

の空氣、日光に接せずして自然に遠ざかり、一は體を勞して心を逸し、おのづから無益の慾念を放散する傾あり、一は身を休めて心を動かし、おのづから無益の慾念を興起する傾あり。一は境を轉じ、從つて心を轉ずるを以て、腦裏を清新にす、一は境を轉ぜず、從つて心を轉ぜざるを以て、腦力を疲弊せしむ。一の結果は安眠なり、一の結果は惡夢なり、一は麁食を美味となし、一は珍膳を麁糲と化す。一は足ることを知らしめ、一は病を覺えしめ、一はついで來るべき勞作に堪ふる準備となり、一は之を厭ふ因由となる。これ何人といへども極めて見易き情狀なり。されば空しく醉生夢死せんとならば則ち止む、苟も身體を壯健にし、精神を活潑にして、大いに

天馬伏櫪の歎に堪へざりき。

世に爲すあらんとする士は、この蟄居の陋習を脱し、戸外の逍遙を好むものたらざるべからざるなり。（幸田露伴）

二六　我が國の海運

見よ、我が國の地勢は宛ら太平洋上の浮城なるを。北は露領及び滿洲を控へ、西は清國四百餘州に接し、南は濠洲及び南洋諸島に對し、東は杳渺たる煙波を隔てて、遙に南北亞米利加に隣れり。環海の島國既に操舟に適すれば、古來國民は風濤を冒して海上を闊歩したりしに、不幸にも一時鎖國政策の覊束に逢ひて、天馬伏櫪の歎に堪へざりき。されどその一度厩を出づるに當りては、勃然として元氣を囘復し、宇内を

蘊蓄 素養

浮寶

奔馳す。現今わが海運の隆昌は四五十年の經營に過ぎずと雖も、その然る所以を惟ふに、國初より蘊蓄したる素養の發揮せられたるに外ならず。

わが國民は蓋し神代より造船、航運に努めて、海外に來往せり。素戔嗚尊は浮寶を作りて韓地に往來し、樹木を植ゑて船材とし、彦火々出見尊は無目籠を用ひて海國に渡り給ひきといふ。神武天皇の中原平定も實に舟師の力に賴り給ひしなり。舳艫相啣みて、朝鮮に驀進し、一擧にして之を征服し給ひしは神功皇后の偉績にして、爾來、彼の國は我に服して、久しく朝貢を怠らざりき。齊明天皇の朝、阿倍比良夫は蝦夷を嚮導とし、舟師二百艘を率ゐて肅愼を擊ちたり。其の後、朝鮮

善隣

玉帛聘問

伊達政宗

支倉六右衞門

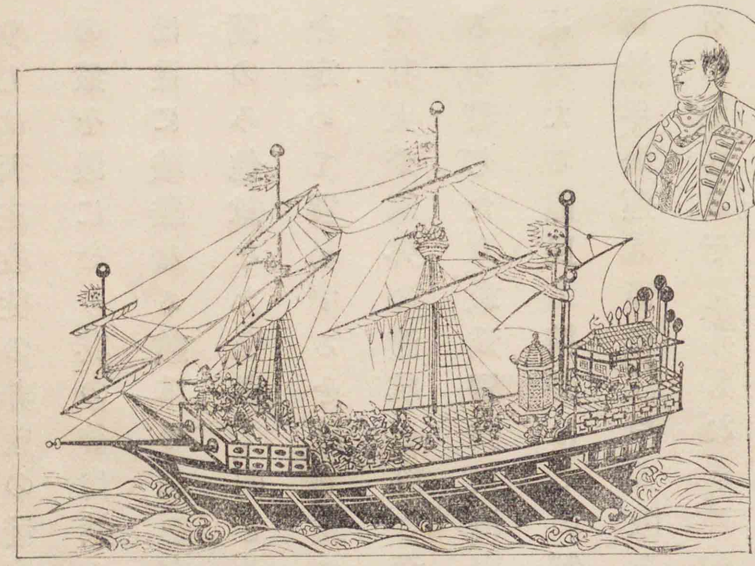
は叛服常なく、遂に我が國は意を其の綏撫に絕つに至りしかど、旣に善隣の誼を結べる唐國とは依然として交際を厚くし、互に玉帛聘問せり。宇多天皇の朝、唐の大亂に會ひて遣唐使を廢せられしかども、商船の私に支那に航するものは尚尠からざりき。

姑く措きぬ

欵待

足利氏の世に至りて、義満が明と修交せしが如き、八幡船が支那近海の民を震慄せしめしが如きは、姑く措きぬ。其の頃、西洋諸國は航海の術大いに發達し、葡萄牙、西班牙の二國特に海上に權力を擅にし、競うて東洋の經略に着目す。かくして洋船の我が國に來航して貿易すると共に、邦人の遠西に渡航するも少からず。鎭西の大友、有馬等の使臣は葡船に搭じて、マドリッドに西班牙王に謁し、羅馬に法王を拜し、觀光四年にして歸朝したり。

德川家康通商に志あり、外船の寄港せるを欵待し、日本船の外航を奬勵し、上下合體して勢威を海外に張らんとす。伊達政宗は其の臣支倉六右衛門を羅馬に遣して、西洋諸國の形



山田長政及び其の乘船

勢を視察せしめ、蒲生氏鄕も使節を同地に派遣すること、前後四回に及べり。濱田彌兵衛は臺灣に航し、我が民の財物を劫奪せる蘭人に逼りてこれを賠償せしめ、山田長政は暹羅に渡りて國事に大功あり、國王の女を娶りて封侯の榮を得たり。

玆に外國交通の致命傷た

異敎の禁

角逐

桎梏

萎靡沈滯

懶眠を覺醒する警鐘

りしは天主敎徒の非望の發覺にして、家康はこれより異敎の禁を嚴にせり。其の後尙禁を犯す者止まざりしかば、家光は遂に峻酷なる鎖港の制を布きて、外人の來航を遏め、只和蘭のみ他意なきを以て、明と共に、長崎一港に限り船舶の數を定めて貿易するを許し、曩に許可したる朱印船をも停めて、邦人が海外の渡航を許さず、又五百石積以上の船を製するを禁じたり。敢爲冒險、東海、南洋に馳驅して葡西二國と角逐したる國民の精神は、この制に桎梏せられて、萎靡沈滯二百餘年、海運も僅に江戸、大阪を中心とする近海の漕航に止まるに至れるぞ是非もなき。

ペルリの來訪は國民が懶眠を覺醒する警鐘なりき。幕府は

國是

嚆矢

頡頏

世界の趨勢に鑑みて、大船製造の禁を解き、歐米大國と通商假條約を締結し、又外國渡航の禁を廢す。かくして幕末の世、內外の交通更に興りて、以て明治維新に及べり。

明治政府は開國進取を以て國是とし、廢藩と共に幕府諸藩の所有船を集め、これを民間に貸し下げて汽船會社を起さしむ。卽ち日本國郵便蒸氣會社にして、わが國における航洋汽船會社の嚆矢なりき。此の會社は內部の紛擾と外船の競爭との爲に久しからずして瓦解せしが、土佐の岩崎彌太郎別に三菱會社を起して、海運の業を營みしに、功績頗る揚り、社運隆々として年々に盛んなり。のち共同運輸會社起りてこれと對抗し、頡頏して相下らざりしが、數年ならずして競

爭の弊に堪へず、合併して日本郵船會社と稱せり。これと前後して又大阪商船會社の設立あり、二社共に今盛んに漕運に從事せり。

明治に於ける海運發達の急速なるは眞に驚倒すべし。日露戰役の起れる明治三十七年の海運力を以て其の元年に比するに、噸數五十四倍餘の增加を見たりといへば、其の後の進步も亦想見するに足れり。今やわが汽船は東南兩洋より進んで歐米に航路を開き、煙を吹き潮を蹴て天下を橫行し、世界の大汽船會社と駢立して、堂々として優等の位置を占む。地理を以て比較すれば、我が國は恰も東洋の英國なり。英國は海運を以て邦家の生命とし、之に倚つて立ち、之に依つて強盛なるに、我は未だ其の道程の半ばにも達せず。將來は遠く、希望は大いなり、勉めざるべけんや。

平和的爭衡

獨逸の現皇帝嘗て宣はく、吾人の將來は水上に在りと。顧ふに今後列國の平和的爭衡は陸上にあらずして、水上にあり、

消長

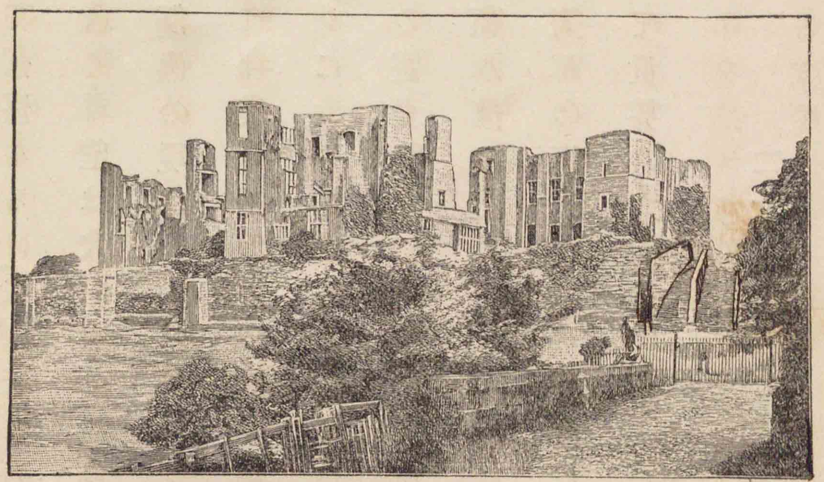
殊に太平洋は其の壇場たるべし。而して海運の消長が國家の盛衰興亡に關するは、古代のベニス、ゼノアに驗し、中古の葡西、蘭に證し、今は英米獨、佛に徵して明かなり。然らば則ち

天賦

天賦の海國たる我が國は、今より益、海國的經營を完備し、以て世界の大海運國たらんことを期せざるべからず。

（開國五十年史による）

二七　保守と自由



イギリスの古城(ケニルウォルス)

英人は保守的なり、祖先より傳來せる事物は、是非を問はずして之を守る。建築は設計の巧妙にして、住居に便利あらんよりも、年ふりて蔦蘿の覆ひ懸れるをよしとし、到る處の宮殿城樓には奇異の服裝したる番兵ありて、今も中古の儘の面影を殘す。學校は、その學科、教授法など時勢の移ると共に變化し行きても、尚昔の儘の名を存し、名を聞きたるだけにては、その性質の判じ難きこと少からず。教會はローマ教を離れて獨立せりといへども、その儀式は他の新教に比するに著しく古風を帶ぶ。國に成文の法律なく、唯判決の先例によりて事件を處理し、先例の一言には動かすべからざる權威あり。かくの如く祖先の遺法を守りて怪しまず、故に淺薄に考ふれば、英人は蹈襲を事として、自己選擇の自由なきが如く思はるゝなり。

成文の法律
權威
理性

獨人は之に反して、何事も理性によりて判斷し、自ら考へて理ありと思ふことは、直に採りて憚らず。ベルリンの市街の年を追うて觀を新にする中に、陋小にして著しく他に異なる家屋の一小區あり。これ實に前時代の構造にかゝり、かく

の如き古風の建築の殘れるは、市中に只この處あるのみ。二十年にして體裁の殆ど一變せること、一は近年同市の發達の速なるによれども、又獨人が舊物保存の念の乏しきにもよらずんばあらず。故に一見すれば、自ら是非を判じて行動する獨人は、最も多く自由を有せざるべからだ。

然るに實際は豫想に反し、英人は自由を享有すること獨人に比して甚だ多し。英國の政體は殆ど全く自治なり、政府は民の便を計るものにして、民を治むるものにあらず」とは、英人が歷史的に養はれたる信念なり。到る處余は自由の英人なりといひて、國民に曾て屈從の念なし。然るに獨人は思想の自由を說くこと極めて盛んなれども、社會に處して抑壓

……獨人に自由なくして、……英人の却つて自由なる

絕對

を受くること多く、官吏、軍人とだにいへば、これを仰ぎてその命に違はんことを恐れ、絕えて英人の如き自由自尊の風なし。理性の判斷を重んずる獨人に自由なくして、傳說を墨守する英人の却つて自由なる、これ果して何故ぞや。

蓋し英人は深く傳說を信じ、之に依りて行動して、毫も私見を加へず。故に衷心に深く恃む所あり、如何なる權力來りて之を壓すとも、動くことなし。獨人は自己の判斷を以て取捨す、自己の判斷は動搖常なく、決して絕對不動の權威を有せず。故に外より脅すものある時は、容易くこれに屈して、まゝ自由を主張する氣力なし。推理は個人の私有にして、傳說は社會の公有なり、その權威に差異あるは怪しむに足らず。然

牛耳を執る

れどもエ英人の傳說を重んずるや、度に過ぐることあり。これがため學藝の進步の往々大陸諸國に後るゝが如きは、蓋しその短所なりといはざるべからず。

二八　ドイツの發達

獨逸が歐洲における新進の强國にして、又その發達の迅速なること、頗る東洋における我が邦に似たり。その古を尋ぬれば、聯邦の組織は早く既にこれありしが、寧ろ一の空名に過ぎず、邦内の諸國互に雄を爭ひて、久しく統一の實を見ること能はざりき。普魯西王精銳の兵を率ゐて慨然として起ち、墺地利を逐斥して、北獨逸の牛耳を執り、更に佛蘭西を擊

龍驤虎視

輓近

符牒

破するに至りて、南部諸州をも聯合し、こゝに堅實なる大帝國を建設するを得たり、實にこれわが明治維新に後るゝこと四年。爾來四十星霜を過ぎざるに、獨逸は非常の飛躍をなし、方今歐洲に於て龍驤虎視の勢あるもの、その領地に日の沒することなしと誇れる英國と相對峙して、唯二國あるのみ。

げにや獨逸の陸軍は世界無比の稱あり、又輓近の海軍の擴張も著大なり、その國光杲々たるもの故なくんばあらず。夫然り、然りと雖も獨逸は啻にその武力に賴るのみならずして、平和の戰爭にも亦驀進奮迅、隨處に敵手を驅逐せんとす。從來、世界の市場に於て、獨逸製といふ符牒は廉價の記號た

恩賚
宿弊

りとはいへ、志かも粗品の極印たるを免れざりしに、今や廉價と精良との保證となり、到る處その製品は外國品を壓迫し、國富はこれが爲に增加し、堅艦精兵もこれより生じて、遂に新進の帝國は宇內に雄飛するに至れり。

熟、獨逸の地勢を見るに、東に國廣く兵猛き露西亞を控へ、西に復讐の念燃ゆるが如き佛蘭西と界し、氣候寒冷にして地味磽确、海岸短くして港灣少く、天賦の恩賚酷だ薄し。加ふるに軍隊偏重の傾向と哲人崇拜の思想とは相伴ひて、商工農民を輕蔑する習慣を釀成したりき。然るにその國民は能く人爲の設備を以て天然の缺乏を補ひ、努力苦鬭、歷史の宿弊を破りて、以て現今の盛運を致せり、亦偉ならずや。

消極的
積極的

獨逸の駸々たる發達は偏に官民協力の結果なり。政府は全力を盡して產業を保護し、通商を勸奬し、敎育を旺んにして弘く上下に知識を增進せしめ、殊に實業學校を設けて實際と學術と竝び行はれしむ。人民は節儉にして、所得の三分の一は貯蓄せざるべからずとは、その間に行はるゝ格言なり。固より質素は佛人も相讓らずといへども、渠等は消極的にして、進取の氣象に乏し、獨人は儉約なると共に勤勉にして、積極的に活動し、摯實耐久、望む所を得ずんば止まず、硏鑽刻勵、以て生產を豐富にし、製品を精巧ならしむ。從うて國內には大工場雲に聳え、大商店甍を列ね、就中クルップ鐵工場の如き、數萬の職工を使役して、宛然一國の觀あり。

想ひきや……と衡を爭はんとは

獨逸工業の長所は巧に理論を實地に應用する點にあり。特に天下獨步の稱あるは化學的工業にして、人造品を以て天產物に頡頏し、一本の試驗管より數十百萬の寶貨を涌出せしむ。世界中に使役する染料品の約五分の四は獨逸製にして、その人造藍は已に印度藍を追窮する勢あり。甜菜糖また熱帶地方の蔗糖を抑壓し、人造樟腦の製法もまた著しく發展せることを思へば、蔗糖と樟腦とを重要物產とするわが臺灣を脅すものは、獨逸の軍艦にあらずして、却つてその化學者の研究室にあらずや。

英吉利は海を掌り、佛蘭西は陸を掌り、獨逸は雲を掌るとは、十八世紀のボルテールが警句なり。想ひきや、佛國王朝の榮華は槿花の露と空しきに、哲理に熱し、文藝に耽りし獨逸は、更に兵馬を整へ、牙籌を執り、機械を運轉し、艦隊と商船とを操縱して、大陸に獅子吼し、兼ねて海上に大英國と衡を爭はんとは。もし九泉の下かの佛國文豪を起し來つて、今日の形勢を見しむるを得ば、果して何とか言はん。(我獨逸觀による)

牙籌

獅子吼

九泉

補訂 新體國語教本 卷八 終

明治四十一年九月廿八日印刷
明治四十一年十月二日發行
明治四十一年十二月十日訂正再版印刷
明治四十一年十二月十五日訂正再版發行
明治四十四年十一月廿一日修正三版印刷
明治四十四年十二月廿四日修正三版發行
明治四十五年二月八日訂正四版印刷
明治四十五年二月十一日訂正四版發行
大正元年八月廿五日修正五版印刷
大正元年八月廿八日修正五版發行

補訂 新體國語教本
每卷定價金貳拾六錢

著作權所有
著者 檢印
不許轉載

著作者 故 藤岡作太郎
補訂者 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 藤井乙男
發行者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 西野虎吉
印刷者 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 水谷景長
發行所 【振替貯金口座】東京第五參貳貳番 開成館
西部販賣所 大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角 三木佐助
東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 林平次郎

(博文館印刷所印刷)